

公開シンポジウム「近松再発見」関連展示「『浄瑠璃』と近松」解題

神戸女子大学古典芸能研究センター公開シンポジウム「近松再発見」パンフレットより転載

川 端 咲 子

田草川 みずき

【会期】平成二十年十一月二十八日（金）・二十九日（土） 午前十一時～午後六時

【展示会場】1 神戸女子大学教育センター一階 行吉学園記念室

2 同 二階 古典芸能研究センター閲覧室

〈はじめに〉

展示の標題「『浄瑠璃』と近松」にいう「浄瑠璃」は、「浄瑠璃御前物語」「浄瑠璃姫物語」「浄瑠璃物語」「浄瑠璃十二段草子」などと呼ばれる物語をさす（以下、解題では「浄瑠璃御前物語」）。この「浄瑠璃御前物語」は、文字通り浄瑠璃という近世芸能のジャンル名の起こりになったものである。三河の矢矧での浄瑠璃姫と牛若丸のたった一夜の恋をめぐる物語を描く「浄瑠璃御前物語」は、新しい語り物として街道筋で人気を呼び、十五世紀後半には都でももてはやされるようになった。中世末から近世にかけて、日本の文学・芸能に多大な影響を与えた「浄瑠璃御前物語」の系譜の中に浄瑠璃作者である近松門左衛門もまた立っている。

（展示会場1）



（展示会場2）



公開シンポジウム「近松再発見」に併せて行うこの展示では、その系譜を示すべく、一「浄瑠璃御前物語」関連資料、二近松門左衛門関連資料、三近松門左衛門と歌舞伎(以上、展示会場1)、四近松門左衛門と浄瑠璃(展示会場2)という構成をとった。

〈凡例〉

・ 解題執筆は、川端咲子(古典芸能研究センター非常勤研究員)と田草川みずき(日本学術振興会特別研究員TC)が担当した。
【市大展示】とあるのは、平成五年に大阪市立大学で行われた、日本近世文学学会秋季大会の際の『近世文学展示資料解題』(執筆は阪口弘之)からの引用である。
・ 執筆にあたっては、特に断らないところでも、『近松全集』(岩波書店)、『古浄瑠璃正本集』加賀掾編・角太夫編(大学堂書店)、『近松門左衛門 三百五十年』(和泉書院)等を参考にしている。また、「一、「浄瑠璃御前物語」関連資料」の項目では、信多純一氏著『浄瑠璃御前物語の研究』(二〇〇八年、岩波書店)を参考にしている。

・ 書名の下に記した記号は、以下の通りの所蔵を示す。

A: 神戸女子大学図書館森修文庫蔵

B: 志水文庫蔵(信多純一氏蔵)

C: 阪口弘之蔵

〈解題〉

一、「浄瑠璃御前物語」関連資料

1 浄瑠璃御前物語(断簡) B



近世ごく初期成立と考えられる奈良絵本の断簡八枚。「浄瑠璃御前物語」の本文は、絵巻系と奈良絵本系の二系統にわかれ、掲出の断簡は奈良絵本系の本文を持つ。奈良絵本の「浄瑠璃御前物語」は複数現存するが、天理図書館所蔵の山崎美成旧蔵本が古形を残す。掲出資料は、奈良絵本らしく華やかに彩色された「泉水揃え」の場面や「忍び」場面などが残る。
【川端】

2 十二たんさうし C

十行二十八丁、筆写本。挿絵なし。古典芸能研究センター長阪口弘之所蔵の新出本。「慶安五年半月書之」との年記の後に、「これよりふきあけのさうしに入 それよりれいぜいなり」との書入れあり。続いて「吹上」以後の物語一丁分が追記され、末尾には「合墨付廿八枚 下至十三段有」と

作成した複製本あり。本展示では、原本と複製本を同時展覧した。

【田草川】

4 やしま C

九ノ十三行、二十二丁半の幸若舞曲筆写本。室町期に流行をみた幸若舞曲のテキストは、江戸期に入ると盛んに刊行されるようになった。掲出資料は、それ以前の室町末期に筆写されたものと推測される。小汀利得旧蔵本で、「をばま」の印記あり。源義経主従が、奥州下りの途次に立寄った佐藤庄司の館で、佐藤継信・忠信兄弟の活躍を物語る「やしま」は、本展示で展覧する「下り八島」・「のぼり八島」をはじめ、多くの浄瑠璃に影響を与えた。

【田草川】

5・6 下り八島 C

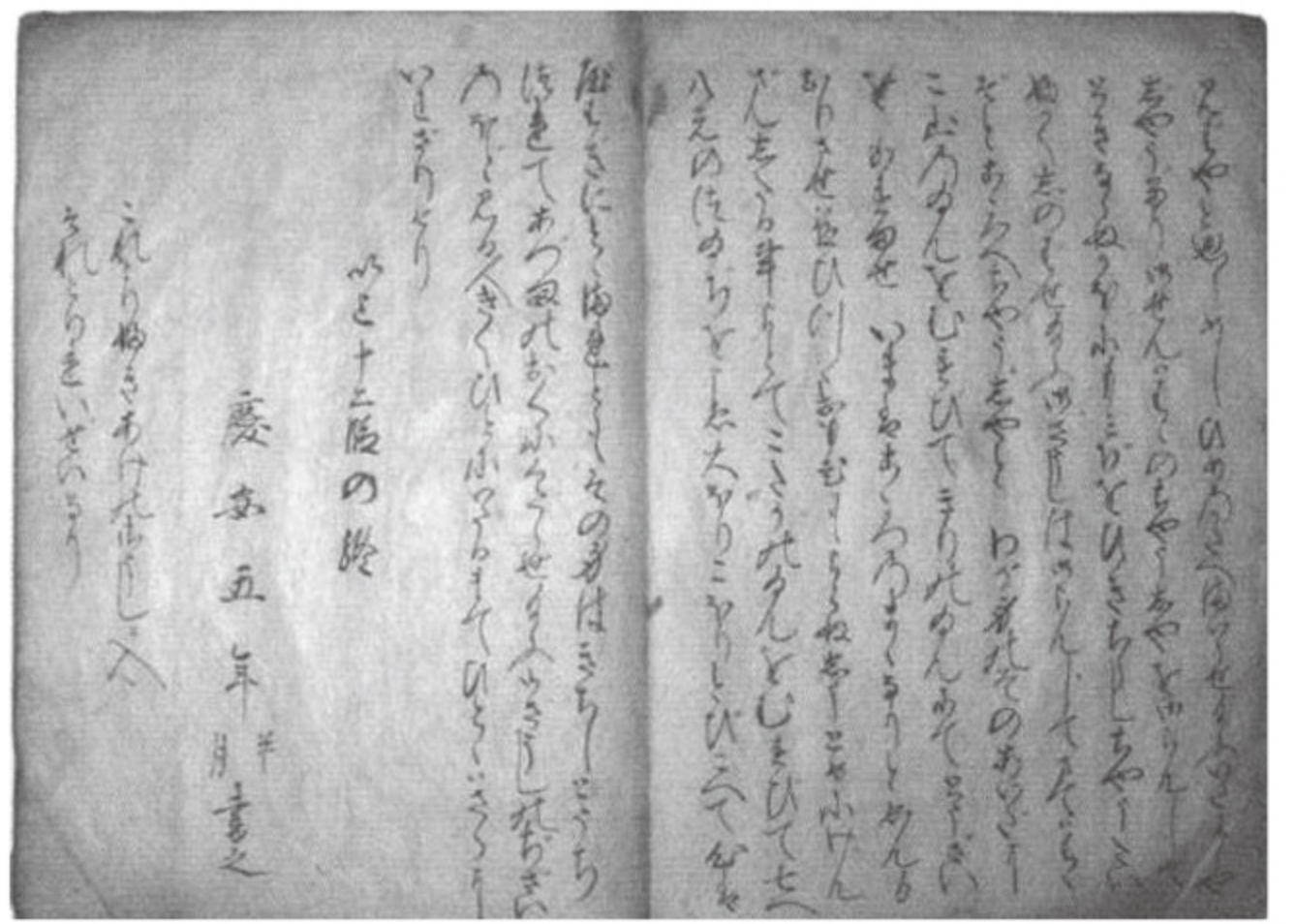
うろこ形や孫兵衛刊。十七行十二丁、八段本。挿絵あり(七



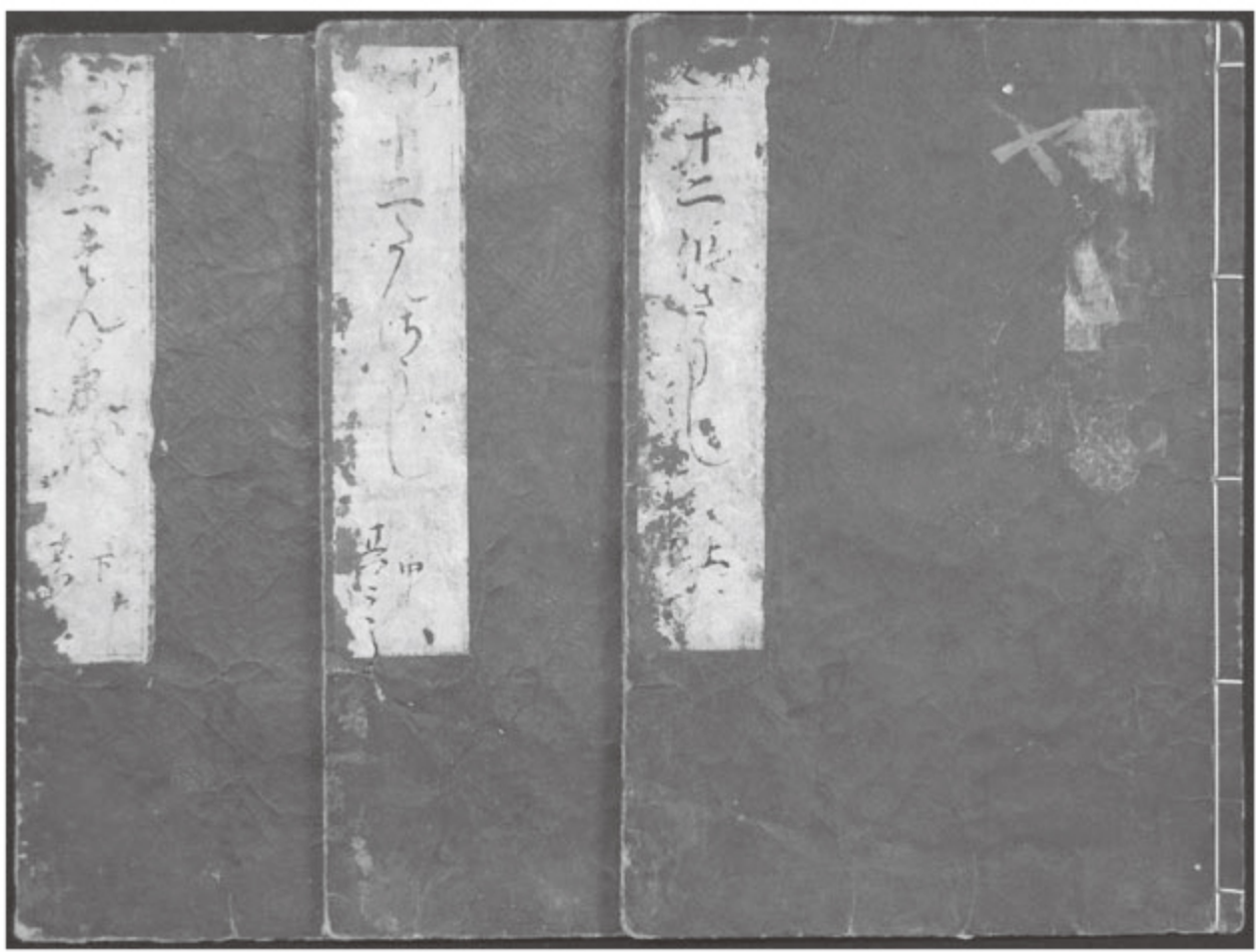
図)。内題「下り八嶋」。「下り八嶋」との書名については、「のぼり八嶋」の項参照。幸若舞曲「八島」、および寛永十六年(1639)正月六字南無右衛門正本「やしま」を踏襲しつつ、「浄瑠璃御前物語」からも強い影響がみられる。特に、義経と侍女冷泉が再会し、浄瑠璃御前の死が知らされる五段目、浄瑠璃御前の墓所での歌問答の後、墓が砕

立に関する信多氏説を証明するものと論じられた。掲出資料の詳細については、著者『浄瑠璃御前物語の研究』にまとめられている。

【田草川】



3 新板 十二段さうし C



上中下三卷、十四行本。本や次兵衛刊の江戸版。原装で、題簽には「新板」とあり。内題「十二段さうし」(上)・「▲第七」のびのだんの事」(中)・「▲第十一ふきあけの事」(下)。上中下巻に、それぞれ三・四・三図の挿絵を収める。神宮文庫にも同種本が所蔵されている。阪口弘之が、大阪市立大学退職の記念に

ける（五輪砕）六段目にその傾向が顕著である。平家討伐の八島合戦物語でありながら、「浄瑠璃御前物語」の優艶な要素をも有する作品。本展示では、宝永五年版「下り八島」（6）も同時展覧する。宝永五年（1708）正月、うろこ形や孫兵衛刊。十七行十一丁、挿絵あり（四図）。【田草川】

7 のぼり八島（大やしま） C



木下甚右衛門刊、土佐少掾正本。十七行十二丁、六段本。挿絵あり（三図）。内題「のぼり八嶋」。「大やしま」と記す原題簽を有する。題簽には他に、「土佐少掾／橘正勝・よりもよしつねたいめ

ん／みかわりつきのふ・江戸／新板」とあり。初段で平家討伐の決意を固めた源義経が、軍を率いて都へ攻め上るという内容から、「のぼり八島」という書名が生じたと考えられている。幸若舞曲の「八島」に拠りつつ、「平家物語」や「源平盛衰記」等の軍記物語を取り入れた硬質な作品。一方、本展示同時展覧の「下り八島」の初段には、源義経の奥州下りが置かれている。そのことから、「のぼり八島」と区別して、「下り八島」を称するようになったとの説が有力である。【田草川】

8 「灰屋伊兵衛刊義太夫節段物集」 C

刊年不明、灰屋伊兵衛刊。奥書には、竹本筑後掾（義太夫）

直伝とあり。長生殿四季・碁立軍法・相生さんぐう・紅葉狩・懐胎十月の由来・道中双六・かうきでん 初段・孕常盤もやう尽・用明鐘入之段・神武天皇五天竺・しほがまの計十一曲を収める。このうち冒頭の「長生殿四季」は、本展示でも展覧する近松門左衛門作「十二段」（元禄十一年（1698）正月以前、竹本座初演）中の婚礼場面の景事。「十二段」は、牛若丸と浄瑠璃御前を主人公として「浄瑠璃御前物語」から多くの趣向を摂取し、いわば近松版「浄瑠璃御前物語」ともいえる作品となっている。【田草川】

9 十二段（八行本） A 10 十二段（十行本） B

元禄十一年正月以前、竹本座初演。八行本の内題下に「竹本義太夫正本」とあることから上演年が推定されている。掲出本9は八行本。裏表紙破損のため書肆は不明。掲出本10は十行本。書肆は京都錦小路通油小路山本六兵衛。8の解題にある通り、本作は近松版「浄瑠璃御前物語」である。これに先立つ延宝五年（1677）七月、京都では宇治加賀掾が、浄瑠璃「てんぐのだいら」を上演している。この時期、近松は加賀掾の一座にいたと考えられる。「てんぐのだいら」も又、「浄瑠璃御前物語」を元にした作品であった。この加賀掾の「てんぐのだいら」と近松の「十二段」は、全体の構成から文辞の面に至るまで多くの対応関係が認められる。また「てんぐのだいら」には「源氏／十二たん」という角書があり、「十二段」は別名が「源氏十二段」であることも併せると、近松初作の浄瑠璃は「てんぐのだいら」まで遡

らすことが出来る。また、忍びの段の文辞から、「てんぐの
だいら」「十二段」は、播磨掾の浄瑠璃「十二たん」を利用
しており、播磨掾の「十二たん」は、前島本系の本文を持つ「浄
瑠璃御前物語」を用いていることも明らかである。【川端】

11 「泉水掬」の「鳳凰丸」（複製） B

12 「忍びの段」の「四季の障子」と「帳台入り」の「姫の寝姿」
（複製） B

杉村治兵衛の横型大々版墨摺筆彩浮世絵の複製。杉村治
兵衛には、「草刈り山路」や「高安通い」など古浄瑠璃や古
物語を題材にした作品がいくつもあつた。その中でも、横型
大々版墨摺筆彩の「浄瑠璃御前物語」を題材とする作品は「泉
水掬」の「鳳凰丸」（東京国立博物館、たばこと塩の博物館
等所蔵）、「笛の段」の「物見の図」（東京国立博物館所蔵）、「忍
びの段」の「四季の障子」と「帳台入り」の「姫の寝姿」（ギ
メ美術館所蔵）、「吹上」（千葉市美術館所蔵）が現存しており、
本来は組物として制作された可能性が高い。作者杉村治兵
衛は、菱川師宣と同時代の浮世絵師である。活躍時期は
延宝から元禄末まで、江戸の通油町に住んでいた。一枚刷絵・
春画の組物・絵本等の挿絵など多くの作品を残しながらも、
署名入りのものや落款のあるものが少ないため、その存在
を忘れ去られ、彼の浮世絵は長らく、師宣のものであると
みなされていた。

11は、竜頭の屋形船に乗る御曹司と案内の十五夜ほか侍
女たちが描かれている。御曹司の足許にはたばこ盆が置か



れ、「浄瑠璃御前物語」の「泉水
掬」の救誓の舟を、当世風に仕
立てた見立絵となっている。

12は、右半分が「忍びの段」、
左半分が「帳台入り」という二
つの場面を合成して描いたもの
である。「忍びの段」には四季の
障子が描かれ、障子の内にいる
侍女の着物には「杉村」の隠し
名が見える。「帳台入り」の部屋
には管弦の後ろらしく琵琶や琴が
描かれ、また、縁には草子が置
かれている。浄瑠璃姫は丈なす
髪を枕屏風に打ち掛けて帳台に座る。いずれも「浄瑠璃御
前物語」の本文にのっとった絵柄である。【川端】

13 源氏十二ヶ月之内中秋 笛の段 B

三代豊国（歌川国貞）の三枚続き大判浮世絵。改印から
安政四年（1857）七月刊行。版元は藤岡屋慶次郎。同シリー
ズは「孟秋」「晚秋」「師走」「雪見月」（東京都立図書館所
蔵）、「皐月」「弥生」「孟冬」（国立国会図書館所蔵）などを
確認できる。三代豊国は、柳亭種彦の草双紙「修紫田舎源氏」
に挿絵をつけ、以後主人公足利光氏の姿を一枚絵に描いた
「源氏絵」というジャンルを確立する。「源氏十二ヶ月之内」
も一連の「源氏絵」の一つであるが、13の「源氏十二ヶ月



之内「中秋」は、「源氏絵」という趣向の上に、「浄瑠璃御前物語」「笛の段」の趣向を重ね合わせた図柄となっている。すなわち、画面左には笛を吹く牛若丸の人物を遣いながら光氏が女性の許を訪ねて行く姿が、画面右では屋形の中で浄瑠璃御前の管弦よろしく琴を弾く姫君と胡弓・三味線を弾く侍女の姿が描かれている。中央に描かれる出迎えの侍女は十五夜の見立てであろう。

【川端】



一 勇齋国芳の錦絵。改印は「普」。落款と改印から弘化頃の刊行かと考えられる。門の外で笛を吹く御曹司と、奥の館から手燭をかざして来る侍女の姿が描かれている。もとは、右に浄瑠璃御前の姿が描かれた二枚あるいは三枚続きの可能性もある。初代歌川豊国の弟子である国芳は、三代豊国（歌川国貞）と同時代の浮世絵師。政治風刺画、伝説や物語に題

材をとった大判三枚続の浮世絵、戯画狂画など多彩な浮世絵を残している。

【川端】

15 牛若丸浄瑠璃姫之御殿忍図 B

揚州周延大判錦絵三枚続。明治二十年（1887）出版。版元は菅谷与吉。手燭を持つ侍女に伴われた御曹司と館の縁先に出て御曹司を待つ浄瑠璃姫の姿が描かれている。振り返る御曹司の視線の先には、月明かりに照らされた泉水が広がっている。揚州周延は幕末から明治・大正に活躍した浮世絵師。

【川端】



二、近松門左衛門関連資料

16 高砂人形遣い画賛（複製） B

柿衛文庫所蔵の「高砂人形遣い画賛」を近代になって複製したもの。もとは扇であつたらしく、折り目が残っている。「高砂人形遣い画賛」には近松の画賛「相



老も目出度けれ共おなしくは相若に社そはまほしけれ 近松門左書

(花押)」とあるが、掲出の複製には画賛はなく、「近松門左書(花押)」のみが記されている。

【川端】

17 浄瑠璃八祖図 B

田能村直入画。浄瑠璃の創始者八人の絵姿を描いたもの。描かれているのは小野お通・角沢(沢角)検校・近松門左衛門・

(部分) 竹本義太夫・尾崎権右衛門(竹



沢権右衛門)・豊竹越前少掾・百大夫・辰松八郎兵衛。小野のお通は「浄瑠璃御前物語」の作者と擬せられていた女性である。こうした浄瑠璃八祖図は、真言八祖図などに倣って、人形操りの

功労者八人を讃えたものであり、近世後期に生まれた因講(太夫と三味線の組合)の寄り合いの際に軸を掛けて祀られた。ほかに、「浄瑠璃者流八俊之図」「浄瑠璃八功神之図」などがある。讃の「天保かのと丑水無月朔輝山小寺画しるす」から、天保十二年(1811)六月に描かれたことがわかる。田能村直入は文化十一年(1814)豊後国に生まれ、九歳で田能村竹田に師事、後に竹田の養子となる。京都府画学校の創設に力を注ぎ、京都における南画壇の中心的立場となった。明治四十年(1907)没。

【川端】

18 浄瑠璃六歌仙 B

明治十三年(1880)三月に、

徳太郎が鶴澤清六と改名した際の配り物である。近松門左衛門・小野お通・竹本筑後掾・角沢検校・豊竹越前少掾(画賛には「筑前」とある)・竹沢権右衛門を六歌仙に見立てた図で、浄瑠璃八祖図の変形である。

【川端】



19 難波土産 C

元文三年(1738)正月刊、三木



平右衛門著。掲出資料は、五巻五冊を一冊にまとめた合綴本。本書冒頭では、近松門左衛門と親交のあった儒学者穂積以貫が、近松の芸論「虚実皮膜論」を紹介している。掲出箇所は、近松の肖像として著名な挿絵「近松平安翁像」部分。なお、後年竹本座の座付作者として、「近江源氏先陣館」「妹

背山婦女庭訓」等々の名作を生んだ浄瑠璃作者近松半二は、

穂積以貫の息。

【田草川】



文化四年（1807）九月、西田庄三郎・中川藤四郎・中川新七刊。藤原吉迪（山白散人）による乾坤二巻の随筆。坤の巻に、「近松信盛画像」として、近松門左衛門の肖像を収める。享保九年（1724）十一月、近松が死を目前にして辞世文を書き残した肖像画の模写。本展示同時展覧の「難波土産」中の、文机に寄って筆を執る肖像とは一転、礼装して威儀を正し、武士の出自を髣髴とさせる姿で描かれている。

【田草川】

21 芝居根元記 C

一卷。淡路人形上村源之丞一座の元禄六年（1693）四月十三日から五月八日迄（操日数十四日）の阿波徳島での興行記録。この時代は、竹本義太夫らさえもが旅廻りを余儀なくされていたが、本興行でも辻札に義太夫・佐内（義太夫甥）の来演をうたい、十四日間で「虎おさな物語」「頼朝伊豆日記」「蟬丸逢坂山物語」など、上方の最新作が次々と上演されている。淡路芝居が中央（上方）の操界の動向を直截に反映していたことも判明。舞台や観客席の様相、入場料から札売・木戸番、触太鼓役といった人々の仕事内容等に至るまで、ひとり淡路芝居にとどまらず、元禄期操芝居の具体的様相を知り得る基本資料である。特に「芝居之図」は、現存最古の劇場図として注目される。

【市大展示】

三、近松門左衛門と歌舞伎

22 今源氏六十帖 B



八文字屋八左衛門刊の絵入狂言本。元禄八年（1695）正月、京都早雲座上演。「住の江なるおの介」役の大和屋甚兵衛と「相生いくよの介」役の坂田藤十郎の共演、というよりは役名からしても競演であったが、役者評判記「役者大鑑」（元禄八年刊）によると、大和屋甚兵衛は大出来、坂田藤十郎は不出来であったらしい。長らくこの狂言本は所在が不明であった。最新の『近松全集』でも、大阪大学が所蔵している高野辰之氏の旧蔵本の写真を底本に使っていた。近年、この狂言本が出現したのだが、これこそ所在不明であった高野辰之氏の旧蔵本であった。

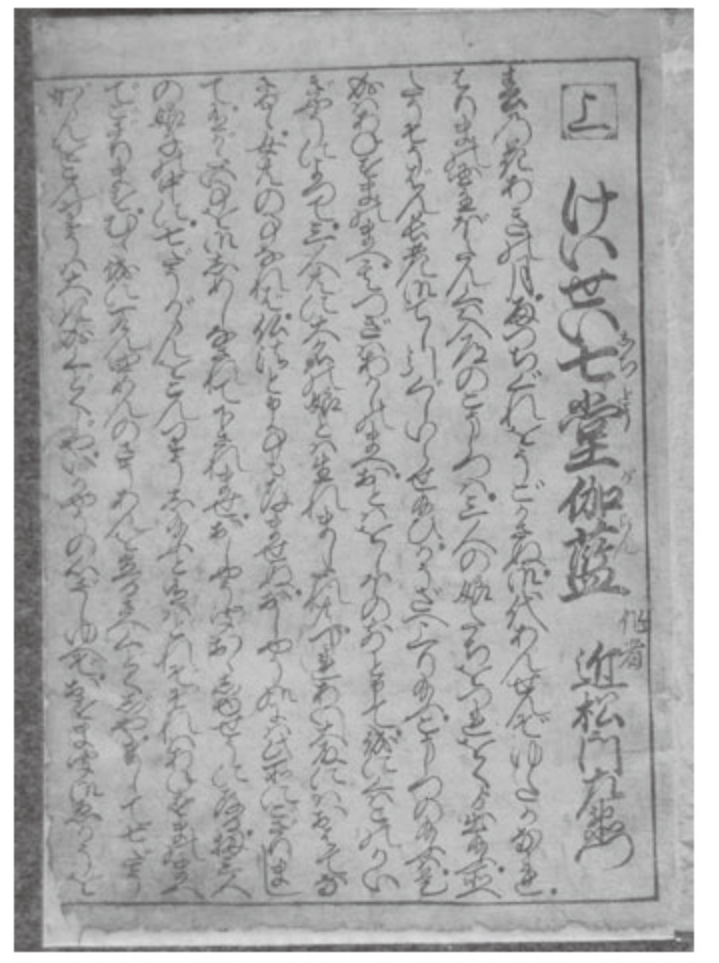
【川端】

23 けいせい七堂伽藍 B

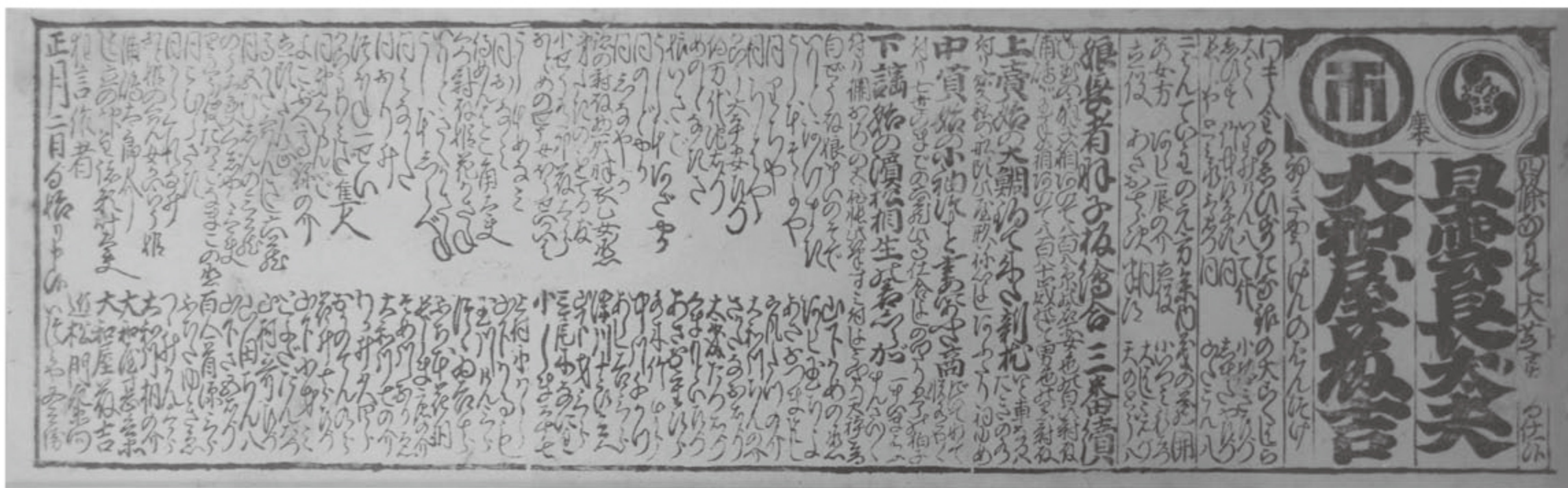
書肆不明の絵入狂言本。八文字屋八左衛門の可能性がある。元禄十年（1697）春、京都都万太夫座上演。現存最古の上本であり、上本の形式が固定する過渡的な形式を持つ。

娘長者羽子板絵合 B

元禄十七年(1704)正月、京都の早雲座で上演された際の役割番付。右端



現在の形は二十六丁であるが、三丁分の落丁が推定できる。「けいせい七堂伽藍」という歌舞伎は、役者評判記の記事によってその存在は知られていたが、内容はこの狂言本が出現して始め



て明らかとなった。坂田藤十郎と大和屋甚兵衛を中心にやつし事、武道事、傾城事、心中、踊りと多彩な趣向が盛り込まれた歌舞伎であるが、評判記によると「去年のけいせい江戸桜。去々年の七堂がらんのはやらざるはいかに」(元禄十二年刊「役者口三味線」)など

25

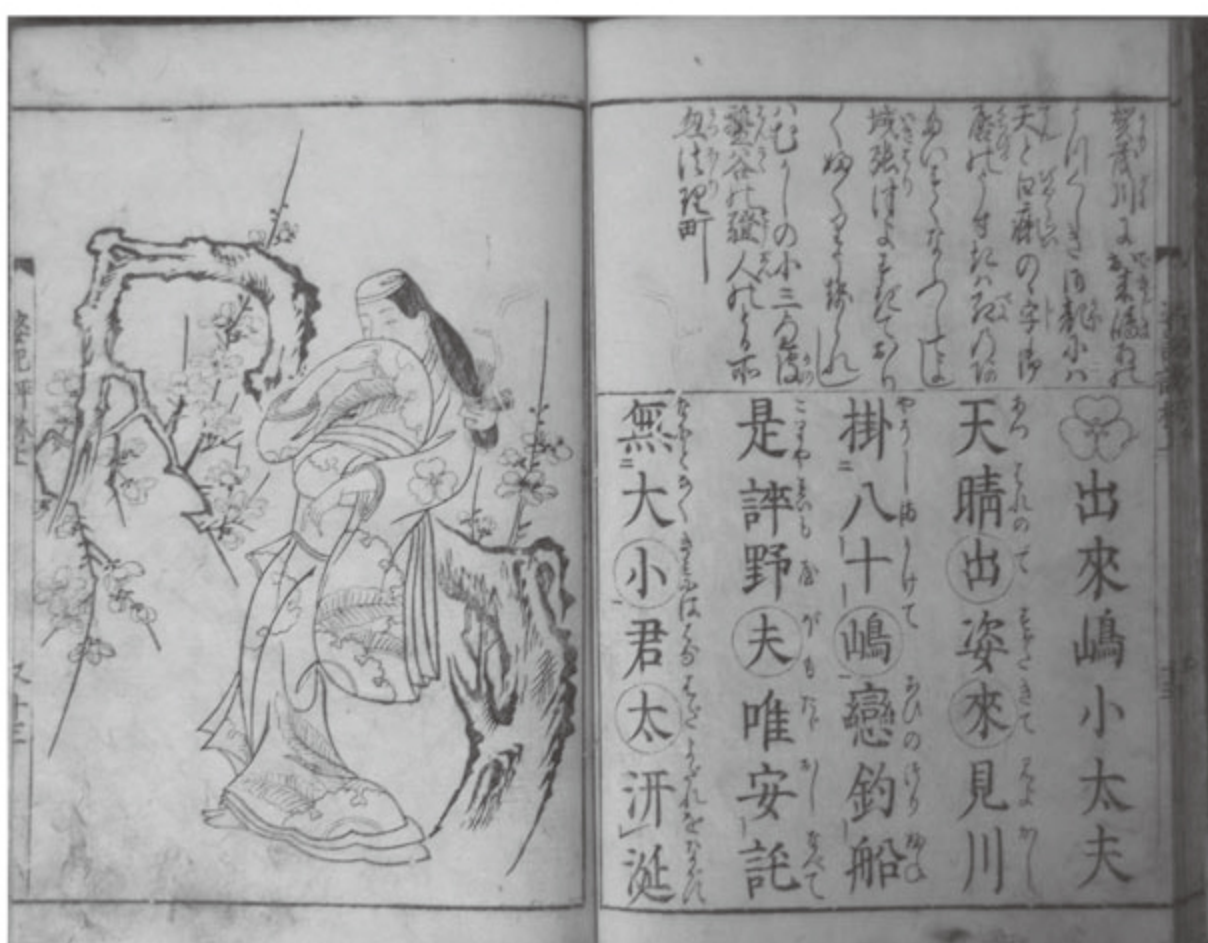
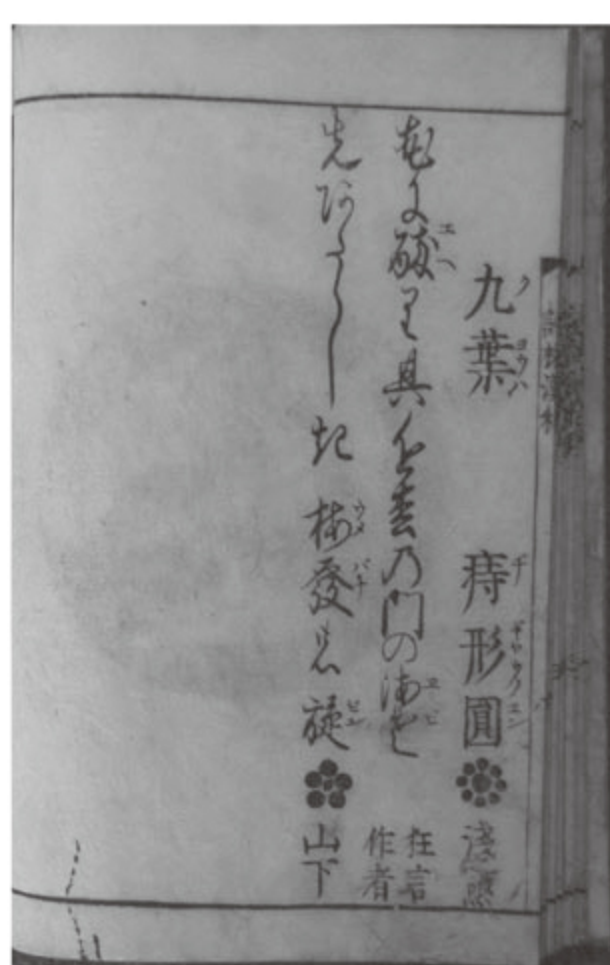
姿記評林 B

を欠くが、この時期の役割番付は現存する物が少なく貴重である。「娘長者羽子板絵合」は、役者評判記「役者舞扇子」(元禄十七年四月刊)の染川十郎兵衛などの評に題名が見え、元禄十七年の初狂言であったことは知られていたが、狂言本が現存せず内容も作者も不明であった。この番付が出現したことにより、役者と役名が判明、さらに「狂言作者近松門左衛門」と記されていたことから近松作の歌舞伎であることも判明した。

【川端】

元禄十三年(1700)刊の役者評判記。華蕊軒蘭水著。「花に酔り其近松の門の海老 狂言作者」と、近松の名を詠み込んだ句を載せる。掲出の本は、十四丁目に「又十三」という丁付のついた表裏共に挿絵の丁がある。これは現存する他の諸本には見られない丁である。

【川端】



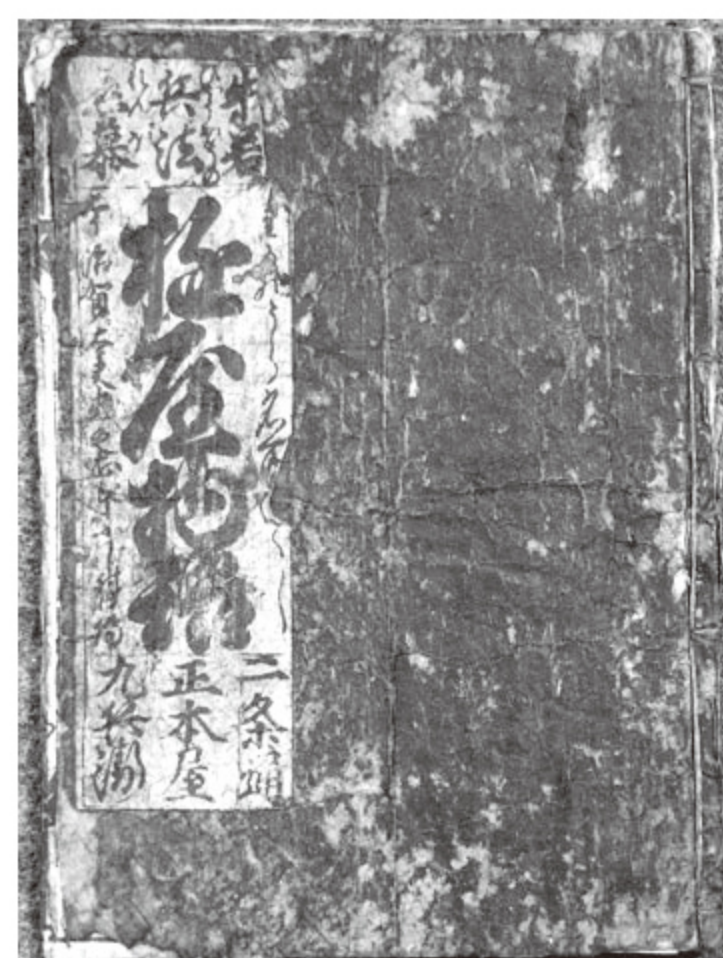
26 江州石山寺源氏供養 (絵入十六行十五丁半) C



「為義産宮詣」(延宝三年(1675)十月)に続く宇治嘉太夫の第二作で、近松推定作。掲出図は紫式部が石山寺に籠り、水想観に入り、新しい物語の構想を得る夢幻場面。この挿絵を踏襲する宝永初年「石山寺開帳」(パリ国立図書館蔵)には「次第〳〵にかわり行大あやつり」とあり、そのからくり演出は、現行大

津祭の曳山源氏車(紫式部山・享保三年(1718)作)の風流仕掛けにおもかげをとどめるとの指摘がある。「加賀掾の家浄瑠璃」ともいわれた程の重要曲で、宝永二年(1705)、坂田兵七郎(藤十郎息)座本「源氏供養」三番続(本作の改作)には、当時七十一才の加賀掾も一座し、夢中の須磨明石の段を語っている。岩瀬文庫蔵「江州石山寺源氏供養」がその折の具体的演出を知る貴重なものである。本図はその原点にくる舞台図。延宝四年(1676)五月、山本九兵衛板。ゴンクール↓リチャード・レイン↓横山重の順に、日本からフランス、イギリスにわたり、再び日本に戻ってきた正本。

【市大展示】



延宝四年(1676)九月、山本九兵衛刊。宇治賀太夫(加賀掾)正本。挿絵あり(五図)。原装で、題簽には「牛若/兵法/恋慕・わかこのうら名所つくし/遊屋物語/宇治賀太夫直之正本ふし付口伝・二条通/正本屋/九兵衛」と記されている。本作の現存正本の中でも、原題簽を残すのは掲出資料のみである。謡曲「熊野」と「浄瑠璃御前物語」に材を取った本作の三段目では、浄瑠璃御前の位置に鬼一法眼の娘桂の前を据え、「浄瑠璃御前物語」忍びの段さながらの物語が展開されている。

【田草川】

28 鳥羽恋塚物語 (十七行十七丁) C

挿絵あり(六図)。本作は宇治加賀掾の語り物で、延宝九年(1681)六月以前に初演されたと考えられている。従来確認されていた本作の正本は、五段目全体が改刻され、そこに収められている節事「九品浄土」が、先行する「大原問答」からの流用となっていた。このことから、阪口弘之は、従前周知の正本は再演時のものであり、本作とほぼ同内容を有する江戸版「袈裟御前物語」の五段目が、「鳥羽恋塚物語」初演時の内容を受け継いだものと推測した(「鳥羽恋塚物語」とその周辺)『文学史研究』21)。掲出の資料は、近年の「鳥羽恋塚物語」新出本。その五段目は「袈裟御前物語」

の五段目と内容を同じくしており、この正本の出現によって、右の阪口説が実証された。

【田草川】

29 つれづれ草 (五行二十一丁・十一丁) B

大本二冊の床本。延宝九年

(1681) 五月頃、宇治座上演。別

名「吉田兼好物語」。宇治加賀掾

の浄瑠璃。本作は近松門左衛門

存擬作とされている。掲出の資

料は、「つれづれ草」の床本、つ

まり、太夫が実際に浄瑠璃を語

る際に使用した本である。節章

や区切りを朱で示すが、これは

加賀掾自筆である可能性が高い。

この「つれづれ草」床本は、現

存する最古の床本であり、後の五行床本の先蹤となった。二

段目と五段目のみが現存するが、もとは各段一冊ずつの五冊

本であったと思われる。題箋には「玉の觴」と書かれている。

これは浄瑠璃の本文中の「色好さらん男はいとさうく敷。玉

の觴のそこなき心地」からとったかと思われる。【川端】

30 世継曾我 (十七行七丁) C

天和三年(1683) 九月、宇治座初演。貞享元年(1684)

の竹本座旗上げ公演に際してこの作品を語った義太夫は、

後年、「世継曾我」への流行歌撰取を、近松が三十年を経

ても後悔していたと書き残した

(「鸚鵡ヶ柚」)。このことから、正

本に作者署名はないものの、本作

は最も早い段階での近松門左衛

門確実作と考えられている。掲

出資料は江戸版の「世継曾我」で、

絵柄・本文の類似点から、元禄

から宝永にかけて江戸で人気を

博した、土佐少掾の正本かと推

測される。【田草川】

31 出世景清 (十行三十二丁) B

鶴屋喜右衛門刊。「出世景清」は、貞享二年(1685)、竹

本座初演。大坂道頓堀において、京都の古浄瑠璃太夫宇治

加賀掾との競演に際して上演された。近松門左衛門と竹本

義太夫、初の提携作であり、浄瑠璃史上重要な位置を占める。

平家の残党悪七兵衛景清を扱った幸若舞曲や古浄瑠璃を下

敷きにしつつも、登場人物の心理を細やかに描き出す近松

の手法により、物語は劇的展開を辿ってゆく。その演劇性

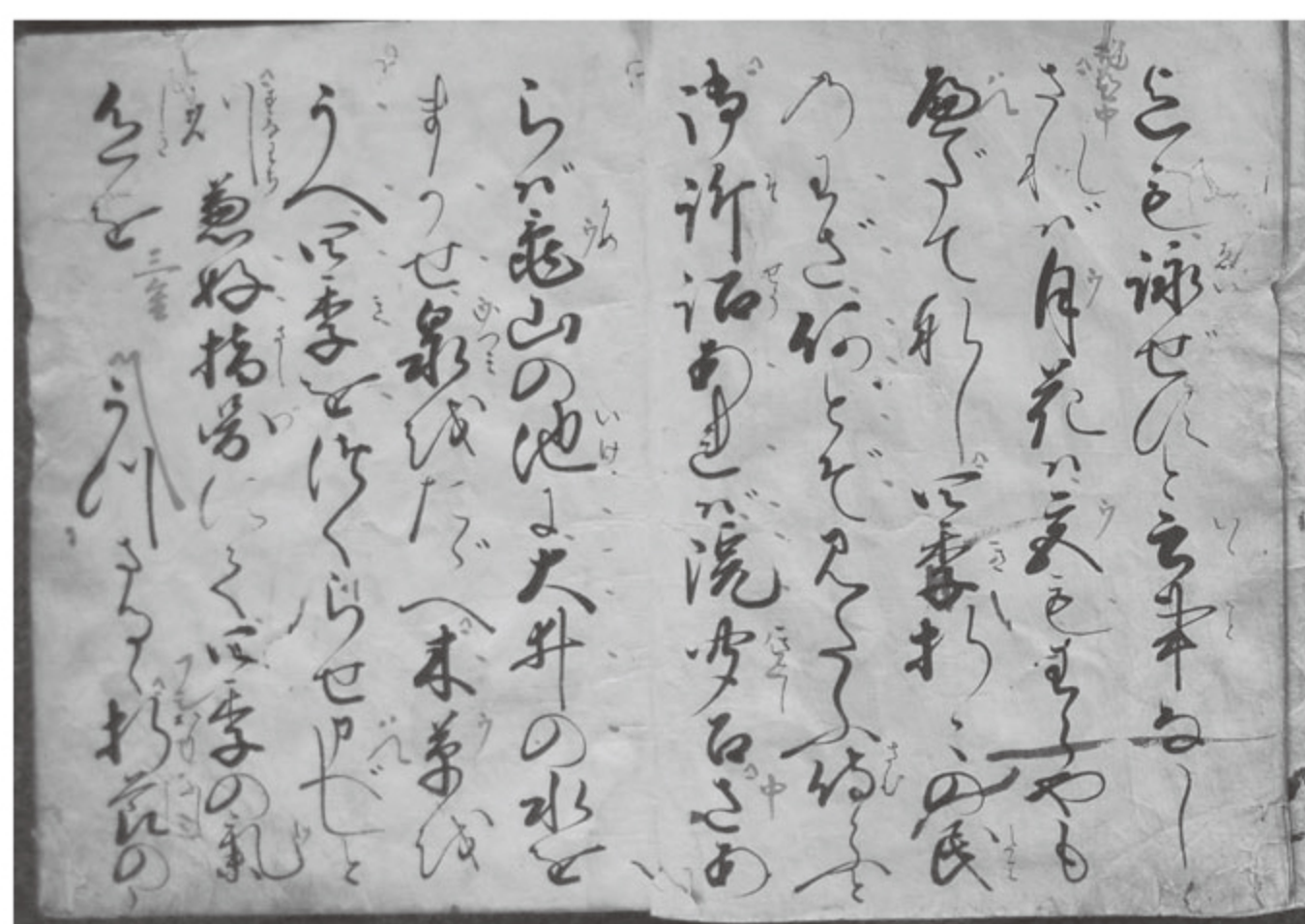
は今日でも高く評価され、古浄瑠璃と当流浄瑠璃(義太夫節)

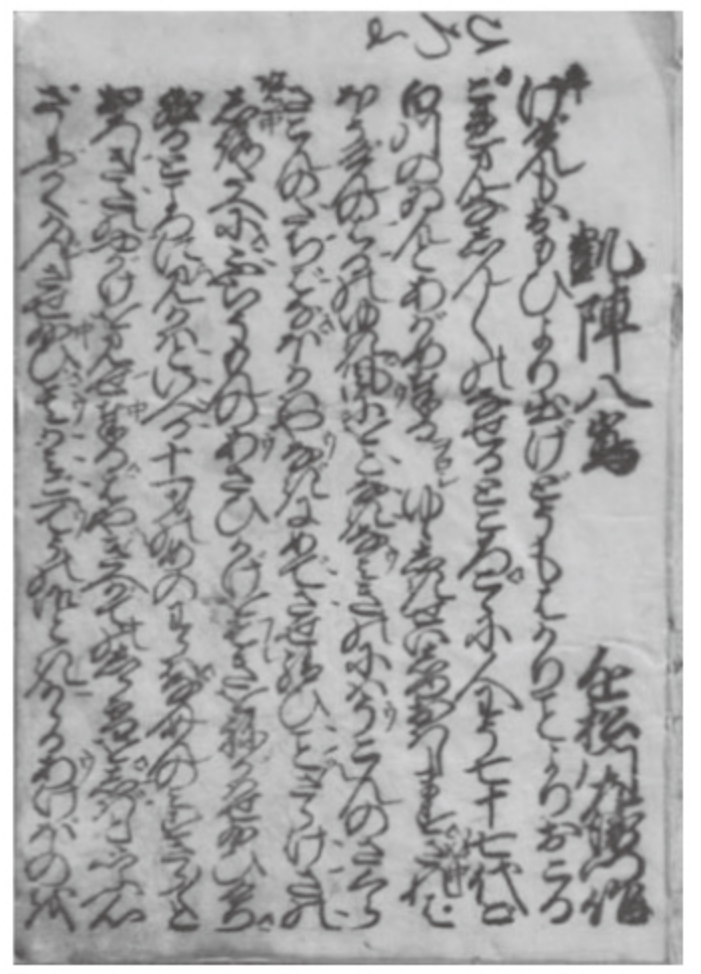
との分水嶺と目される作品である。【田草川】

32 凱陣八島 (十行三十丁) B

鶴屋喜右衛門刊。31にある貞享二年の宇治加賀掾・竹本

義太夫競演の際に、加賀掾が語った浄瑠璃。加賀掾はこれ





に先立ち、井原西鶴に依頼した浄瑠璃「暦」を道頓堀で上演したが不人気で、急遽変更して上演したのがこの「凱陣八島」である。「凱陣八島」は当たりをとるが、興行中に劇場が出火し、

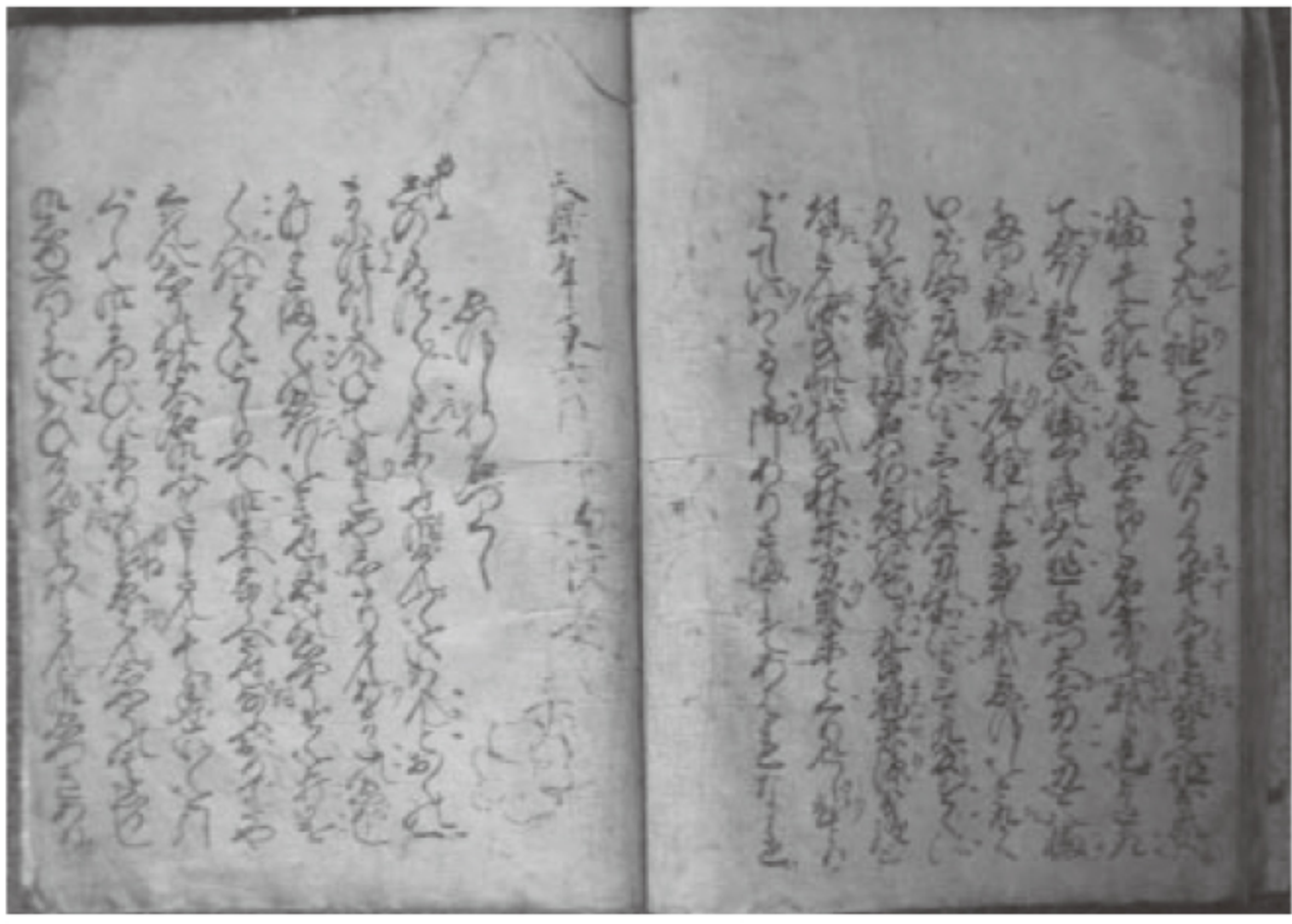
34

源氏烏帽子折 (十八行十一丁半) A
八文字屋八左衛門刊。絵入本。「源氏烏帽子折」は、義太夫の「烏帽子折」(33)を改作した角太夫正本である。角太夫による上演の時期は不明ながら、義太夫による上演が先行することは明らかである。角太夫の正本の大幅な改作箇所は第五段。すなわち、義太夫正本では頼朝が配流されている蛭小島の場面と義経の伊勢参宮の場面からなるのに対し、角太夫正本では義経の秀衡館入りへと改作されている。
【川端】

加賀掾は京都へ帰ることになる。「凱陣八島」の作者については、かつて近松門左衛門か井原西鶴かとの論争があった。現在は井原西鶴作というのが定説となっている。しかし、掲出資料のように、「凱陣八島」の内題下に作者近松門左衛門と記したものもある。これは、浄瑠璃作者として人気が高かった近松門左衛門の名前にあやかろうとした本屋の販売戦略の結果とみなされる。
【川端】

33

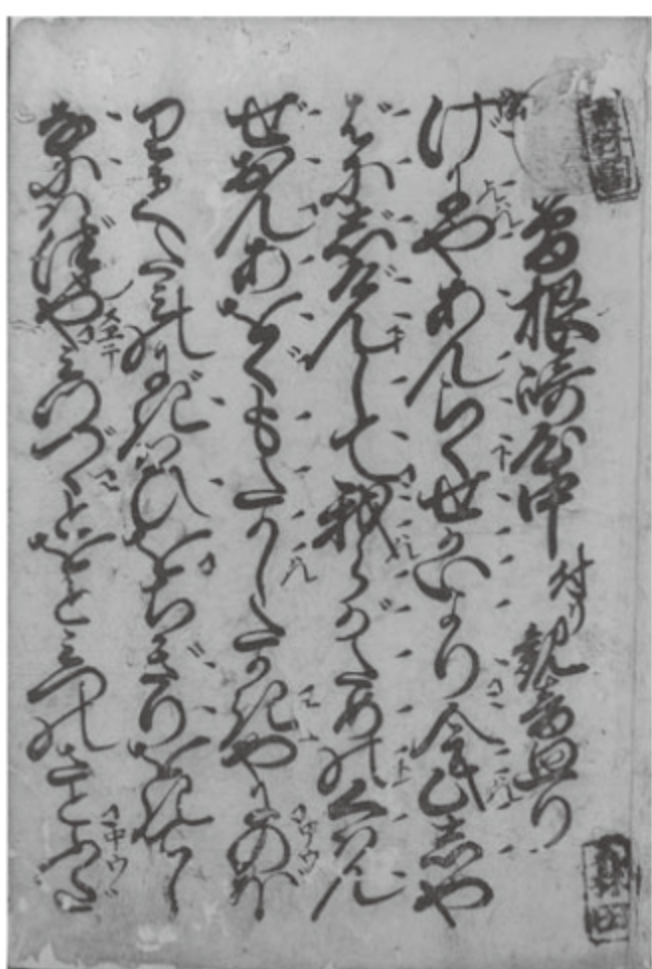
烏帽子折 (八行四十六丁半 (落丁本)) B



献上本。元禄二年(1690)一月、竹本座初演。「伏見常盤」や謡曲「烏帽子折」を題材にした近松門左衛門作の浄瑠璃。初演時の正本(現在所在不明)には元禄二年九月の伊勢内宮・外宮遷宮の当て込みがあること、第五段本文に「(今年は)かのえむまのとし(元禄三年の干支)」とあることから、上演年が推定されている。

35

曾根崎心中 (六行本) A 36 (八・十行本) C



「曾根崎心中」は、元禄十六年(1703)五月、竹本座初演。近松最初の世話物である本作は、おいに人気を博して竹本座の経営危機を救った。近松は、当時の社会的な価値基準からは逸脱した手代徳兵衛と遊女お初の恋と心中を描き、「未来成仏疑ひなき恋の手本となりにけり」との賛辞で作品を結んでいる。この「曾根崎心中」の成功は、近松が竹本座の座付作

者となるきっかけにもなった。掲出の「曾根崎心中」六行本は、六行四十丁、山本九兵衛・山本九右衛門刊。甲南女子大学図書館所蔵の同版本には近松の序文あり。六行という行数、序文ともに珍しく、本作の大当たりを記念する出版物かと考えられている。一方、「曾根崎心中」八・十行本は、既刊の同作八行本と十行本を組み合わせて刊行されたもの。掲出の初丁から三丁までの、「観音廻り」にのみ八行本が用いられている。山本九兵衛・山本九右衛門刊、奥書に竹本筑後掾とあり。

【田草川】

37 用明天王職人鑑 (八行本) B

末丁欠。宝永二年(1705)顔見世、竹本座初演。「曾根崎心中」成功後、竹田出雲が竹本座の座元となり、太夫に竹本筑後掾、人形遣いに辰松八郎兵衛、座付の作者に近松門左衛門という陣容で竹本座は再出発することとなる。「用明天王職人鑑」はその一座の顔見世興行に上演された。聖徳太子信仰の表れである「荒陵寺御手印縁起」出現から七百年、様々な聖徳太子関連の催しが行われる中でそれを当て込み、かつ四天王寺村に生を受けた筑後掾の再出発を寿いだ作品であった。中世以来の「草刈り山路」の物語を下敷きにしながら、第三段には謡曲「道成寺」を取り入れて辰松八郎兵衛が遣う手妻人形を活躍させ、全体に竹田からくりによる大掛かりなからくりを組み込むなど、見せ場の非常に多い浄瑠璃となっている。

【川端】

38 傾城反魂香 (八行本) B 39 (十行本) B

宝永五年(1708)、竹本座初演。一般的な浄瑠璃の五段構成とは異なる、歌舞伎の構成に倣った上中下三巻仕立て。内容面でも歌舞伎色が強い。これは、宝永五年二月に亡くなった江戸の歌舞伎役者中村七三郎を追善する意図で作られたためである。反魂香とは死者の魂を呼び戻して煙の中にその姿を見る事が出来る香のことであり、その反魂香をたいて、亡くなった中村七三郎の姿を舞台に見ようという七三郎に対する追慕も込められている。中村七三郎は、元禄十一年(1698)京都の早雲座で「けいせい浅間嶽」を上演し、大当たりとなった。当時近松門左衛門が所属していた都万太夫座は、早雲座のこの勢いに押されつづけ、「けいせい仏の原」で漸く挽回することができた。七三郎追善の浄瑠璃として近松は「傾城反魂香」に、様々な七三郎得意の演目・演技を取り入れている。特に、「三くま野かげろふ姿」は、元禄十一年の「けいせい浅間嶽」で人気を博した、起請文を焼いた煙の中から姿を現した遊女奥州が恋人巴之丞に恨みを述べるといふ趣向を取り入れている。

【川端】

40 心中万年草 (八行本) B

宝永七年(1710)四月八日より、竹本座初演。「鸚鵡籠中記」宝永七年四月九日条に、「昨日よりかへ席は、源氏大かけ物十ふく対(中略)切り高野山心中万年草」とあることから初日が明らかとなる。同じく「鸚鵡籠中記」には、この浄瑠璃が、宝永七年二月に高野山女人堂で実際にあった、南谷吉祥

院の小姓桑之介とかみやの宿さいか屋の娘むめの心中事件を取り上げたものであることも記されている。

【川端】

41 吉野都女楠 (十行八丁本) C

宝永七年(1710)、竹本座初演。挿絵あり(一図)。本作は、宝暦版「外題年鑑」に「宝永七庚寅の年竹本筑後掾の語られし吉野都女楠の時よりも大字七行と成し始」と、七行本の嚆矢として書かれていること、書誌学的な観点から注目されてきた。しかし近年の研究で、七行本に先行すると考えられる八行本の存在(大阪市立大学所蔵)が報告された。掲出資料は、三段目のみの零本ながら、現存唯一の「吉野都女楠」絵入本である。

【田草川】



42 冥途の飛脚 (七行本) C

山本九兵衛・山本九右衛門刊。奥書に、「筑後掾高弟／竹本播磨少掾」「竹田出雲掾」とあり。「冥途の飛脚」は、正徳元年(1711)竹本座初演、近松門左衛門作。実際にあった公金横領事件を元に執筆された本作は、多くの梅川忠兵

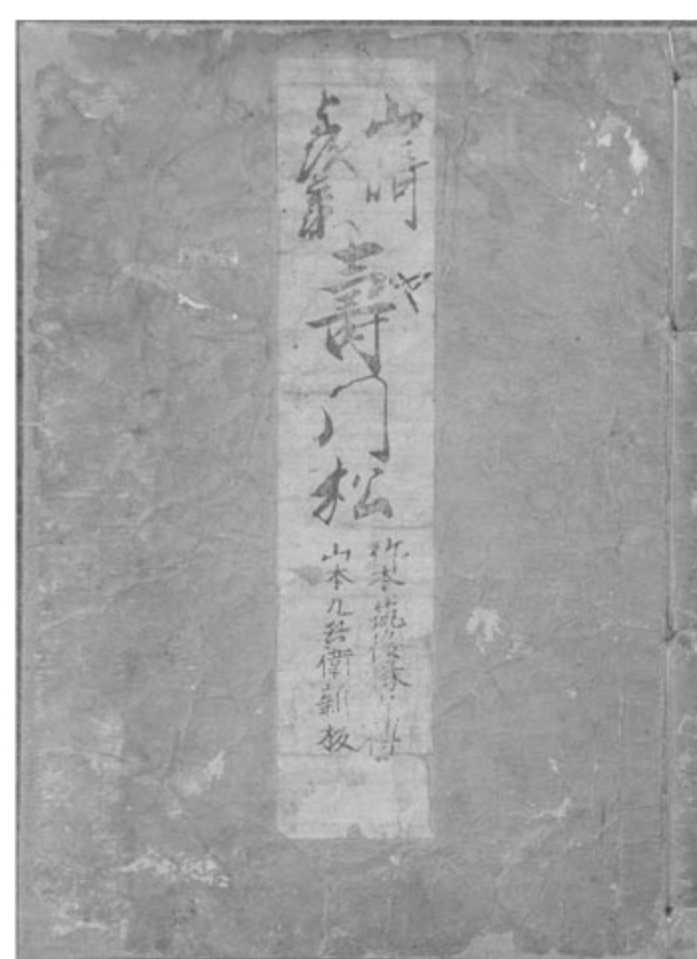
衛物の中でも特に評判を得た。後には、浄瑠璃「傾城二度笠」(正徳五年(1715)、紀海音作)・「けいせい恋飛脚」(安永二年(1773))、歌舞伎「恋飛脚大和往来」(寛政八年(1796))等、現在の文楽・歌舞伎上演へと繋がってゆく改作も生じている。よく知られる「封印切の段」は、中之巻新町越後屋の場面。八右衛門と忠兵衛の緊迫したやりとり、堪えかねた忠兵衛の封印切に、梅川の嘆きと諫言(クドキ)が続ぎ、物語が急展開する劇的場面である。

【田草川】

43 国性爺合戦 (十行本) A 44 (七行本) B

正徳五年(1715)十一月十五日、竹本座初演。掲出本44は鶴屋喜右衛門刊。正徳四年九月十日竹本筑後掾が死去する。筑後掾亡き後の竹本座は、総帥となるべき太夫が決まらぬままに低迷を続ける。最終的に中心太夫となったのは、「語り」に秀でた竹本政太夫であったが、彼は声量が乏しいという欠点を抱えていた。そうした中で正徳五年の顔見世に、「国性爺合戦」が上演された。政太夫の語りを聴かせる三段目、目を奪うような大仕掛けなからくりが展開する四段目と、聴かせ場・見せ場が巧みに織り込まれ、話の内容も日本と中国を股にかける壮大な物語であった。この浄瑠璃は大当たりとなり、あしかけ三年上演される。その様子は「今昔操年代記」(享保十二年(1721))に「あしかけ三年持こたへ。見物から子齧の道行口まねせぬ人はなし。」と記されている。

【川端】



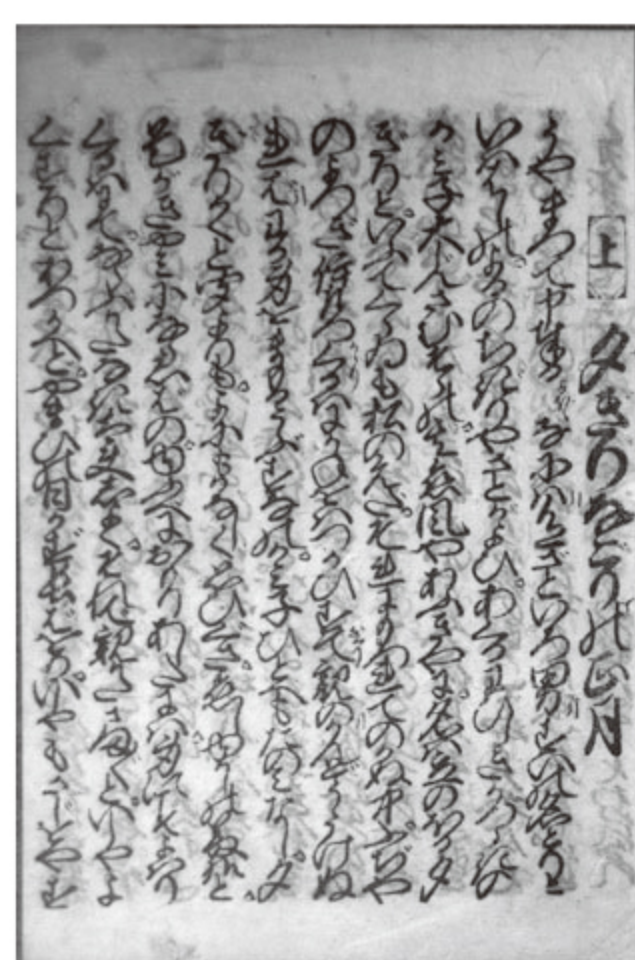
山本九兵衛・山本九右衛門刊。奥書に「竹本筑後掾」とあり。原題簽を有する。享保三年(1718)正月、竹本座初演の世話物。実説ありとされるが、仮構性のきわめて高い作品となっている。山崎与

次兵衛と遊女吾妻の恋を中心に据えつつ、吾妻を慕い、本来恋敵となるはずの難波屋与平の、与次兵衛に対する義侠心が鮮やかに描かれる。「双蝶蝶曲輪日記」(寛延二年(1749))等、のちに現れる男達物の要素を胚胎した作品。【田草川】

山本九兵衛刊。享保七年(1722)四月二十二日、竹本座初演。近松門左衛門は、享保九年(1724)十一月二十二日、享年七十二歳で没する。絶筆となったのは享保九年一月竹本座初演の「関八州繫馬」である。掲出の「心中宵庚申」は、最後の世話浄瑠璃となる。享保七年四月六日に大坂の八百屋半兵衛と妻の千代が生玉の大仏勧進所で心中した事件の浄瑠璃化。二人の墓は、今も大阪下寺町銀山寺に残る。「心中宵庚申」上演に先立って豊竹座では、同じ事件を取り上げた紀海音作の浄瑠璃「心中二ツ腹帯」が上演されている。

【川端】

歌祭文を集めた段物集、「歌さいもん名取丸」の残欠か。



上夕ぎりなごりの正月・下夕ぎり伊左衛門／涙のあいの山・心中さいもん おしゆん・嶋原小てう心中うたさいもん・上あぶらやおそめ久松心中・下おそめ久松／思ひのたね油・八百屋お七の、計七曲が合綴されている。歌祭文は、宗教的歌謡であった祭文が世俗化したもので、元禄期以降は掲出資料中にもみられる心中物が人気を博した。掲出の歌祭文は、延宝六年(1678)正月に没した実在の遊女・夕霧を悼み、歌舞伎「夕霧名残の正月」(延宝七年)、近松門左衛門作の浄瑠璃「夕霧阿波鳴渡」(正徳二年(1712))春)など、度々芝居に仕組まれた夕霧伊左衛門物に関わる。

【田草川】

『浄瑠璃』と近松

神戸女子大学古典芸能研究センター

公開シンポジウム「近松再発見」関連展示

【期間】平成二十年十一月二十八日(金)・二十九日(土)

【時間】午前十一時～午後六時

【場所】〔展示会場1〕一階 行吉学園記念室

〔展示会場2〕二階 古典芸能研究センター閲覧室